

## 『西遊記』から考えるユートピアとディストピア ——「IT化」の現実の中で——

関 下 稔

### I

筆者は少年期から親しんできた中国の代表的な古典、『三国志』、『水滸伝』、『西遊記』に自己流の解釈を施そうと企図し、頭書の2著書に関しては雑文を書いた<sup>1)</sup>。最初は一般に流布している説とは異なる異説をあえて開陳したいという、多分に遊び心からでたものだった。とはいえその底にある真の狙いは、秘密のベールに包まれてとかく真相がわかりにくい社会主義体制の内側、とりわけ現代中国の深部に関して、古典的な逸話を使って間接的に類推するという手法を試みることにあった。その手の寓話や逸話や故事を使った推測は旧ソ連でもアネクドート（政治的逸話・小話）として一般に密かに流布したし、中国でも現実の複雑な政変や政策変更をこうした過去の逸話に託して語るという間接話法が繰り返しておこなわれてきた。それだけ思想的・イデオロギー的・政治的締め付けが強く、政府の発表する「公式見解」以外の意見の余地を許さない風土が支配的になっている。別様にいえばイデオロギー支配を特別に重視しているということでもある。なお念のために付言すれば、こうした傾向は「自由主義体制」を自認する西側世界でも大同小異にあるが、ただしそこでは近代市民社会における民主主義的土台が様々な制約を突破して幅広くかつ奥深く定着してきている。そのため政府のイデオロギー操作は、むしろ公式見解を必要最小限に留め、多くはビジネスとしてのマスコミ機関を通じた間接的な報道や観測を最大限かつ巧みに利用しようとするやり方が多くとられている。したがって営利を目的としたマスコミ企業が伝える報道の真偽を聴視者としての一般大衆が判断することになる。そこでは商品としての報道記事・映像の注目度というニュース価値（＝「商品価値」）に加えて、その底流にある、報道を作る側における正確さや緊要性、そして真実味を巡るイデオロギー闘争が鎬を削ることになる。ただし日本ではNHKという公的機関が圧倒的に支配的であり、そこには政府や一部の有力企業の息が大きくかかりがちだという独特の特徴があり、

それが民間営利企業であるマスコミ報道機関の性格にも大いに影響している。場合によってはNHK以上に経営サイドの思惑を反映させがちなことも起こりうる。なお後段で詳しく論じる予定のインターネットの進行は、マスコミではなく、個人間の「口コミ」を幅広く普及させることになった。それは上記のビジネスとしてのマスコミ機関を通じた間接的なものではなく、相互交信を通じた直接的な対話を進めることになり、一面ではより直截的になり、本音を吐露しあって真実に近づけられるという可能性と、他面ではフェイクと呼ばれる偽の情報やゆがめられた情報、さらには相手へのピンポイント攻撃などが広がる側面を合わせ持つことになる。

さて『三国志』では国内経済の成長に伴う経済強国から、さらには軍事を交えた覇権国にまでのし上がろうとする中国の戦略・戦術を米、日とのトライアングル関係の推移の中で類推した。だがそれが米日の同盟と、それと中国の対抗と協調という楕円形に事実上変形してしまい、その中で中国の選択肢は限られてざるを得なかった。そして日本もバランスとしての役割を当初は狙っていて、対中経済進出が閉塞経済の脱出路となることを大いに期待していたが、ことある毎にアメリカの掣肘—たとえば日中国交正常化に努めた田中角栄がロッキード事件の陥穽に陥ったなど—にあい、「日米同盟」という名の事実上の対米従属の深化に進んでいった。それらの結果、米（日）中関係は協調面よりも対抗面が表に出やすい傾向を辿ることになる。

また『水滸伝』では共産党の事実上の一党独裁体制、なかんずく毛沢東の権力奪取と拡大、そして独裁化を想起してみた。とりわけ何度にも渡る政変や粛清にもかかわらずナンバー2の地位を維持し続けた周恩来や、毛沢東の愛将として鄧小平と林彪がその後継の座を争って登用と失脚を繰り返すさま、さらには秘密警察組織の長として股肱の臣となって暗躍した康生の役割などを推察してみた。いずれも一般に流布している解釈とは異なる異説であった。幸いにして一部からは好評をいただいたが、それは上のことを深読みしてくれた一部好事家からの反応であり、当然にその真意が理解不能な多くの人々にはわさびが効き過ぎたのか、通り一遍の読後感か無反応のままであった。

予定では、最後に残った『西遊記』に関しても書くつもりでいた。そこにはその最初の部分である石猿（後の孫悟空）が天界で暴れまくる話を、大唐帝国の宮廷内での権力闘争と解釈し直した諸星大二郎の『西遊妖猿伝』<sup>2)</sup>という奇想天外な発想に出会ったことが大いに刺激になった。そして西遊記に新味を出そうとした映画や読み物—たとえば孫悟空を少々小ずるい、世間ずれした性格の持ち主に設定し、それとは対照的に猪八戒を欲望のままに行動する「ノー天気」なものとするなど—を物色した。また沙悟浄を孫悟空や猪八戒や竜馬のように動物の化身としてではなく、三蔵法師と同じ人間として、しかも煩惱に苛まれる普通人として、悟りを開く高貴な三蔵法師と対照的に描いた中島敦の説<sup>3)</sup>なども読み漁った。あるいは実際の天竺への旅を検証しようとする西域研究の跡を追ったりした。旅の途上で悟空は、間違った行為をした際には三蔵によって頭の金の輪を締め付けられて懲戒されるので、罰は感じて、罪の意識はな

い。自省心に基づく罪の自覚と外的権威からの罰の強制との間に人間とけものとの間の根源的な差を求める思想がその底にはある。さらに付言すれば、諸星の『西遊妖猿伝』第三部「西域編」では大唐帝国の域外にある、異民族—正確には種族や部族というべきで、近代的な民族ではない—が支配する未開社会を漢化するという使命を三蔵が密かに帯びてもいるという設定で、沙悟浄はその異界社会の人間で、その間（はざま）で苦悩するという側面も合わせ持つと、筆者は推測している。この推測は穿ちすぎるであろうか。最近の我が国における中国史研究では、魏晋南北朝期の分裂とその後の随唐帝国による統一を漢化の拡大過程、さらにいえば隋、唐自体もそうした旧来の漢族の外側に出自を持つととらえ、それが五代十国を経て宋にも繋がるという考えが広がってきている<sup>4)</sup>。あるいはそもそも中国中心の旧来の狭い東洋史観を捨て、遊牧民を含めたユーラシア史としてこれを考えるべきだという考えも台頭してきている<sup>5)</sup>。その他にも多くのヒントをえたが、特段に新味も思いつかないままに、書棚の隅に追いやられ、いつしか視界から遠ざかっていった。

時代が移り、この間に現実の社会主義体制の瓦解ばかりでなく、その社会主義的理想郷の絵図面そのものもはなはだ怪しげなものであることが判明してきた。そしてIT革命と呼ばれる情報通信の革新の動きは、これまでのユートピア観を一新させるほどの強いインパクトをもたらした。モノ作り（製造業）からコト作り（知識・情報産業）への重心の移動は知的創造活動と情報サービス業の地位を飛躍的に上げた。その結果、一方では日常生活の利便性とグローバルに広がる人々のコミュニケーション力の拡大をもたらすと同時に、他方で従来にはない著しい所得格差が発生したことで、アメリカをはじめとする西側世界ではにわかに新しいユートピア像や、あるいはそれがもろくも崩れ去る現実のディストピアの実態を暴露する作品や書物が次々と出されるようになった。またロシアでは社会主義体制そのものが崩壊し、西側システムを取り入れるような外装をとりつつも、その実エネルギーと軍事に依拠する強権的な政治経済体制へと変貌を遂げた。こうした性格は東欧諸国の後継政権にも多かれ少なかれ反映されている。そして完全に西側世界に同化しようとする動きをロシアが牽制し、ウクライナとの間で戦争まで起こしている。中国でも自己流の市場経済化の推進を極めて強権的な支配体制の下で進めていて、その結果、確かに強国へと上りつめ、目下アメリカとの間で覇権国争いを繰り広げているが、その反面では内部的にはその開発路線の象徴としての不動産・住宅建設事業の焦げ付き・頓挫を頂点に、金融的・経済的な成長鈍化と停滞・不安定化に見舞われている。加えて、習近平の三選という異例な体制下での共産党政権内の権力闘争も激化し、腐敗や汚職や粛清も跡を絶たない。彼は鄧小平の「先富論」を自己流の「共富論」に看板のすげ替えをし、かつ毛沢東になぞらえて、神格化による個人的独裁化まで図ろうとしているかにみえる。その具体像は北朝鮮にあってはさらに極端に肥大化されて展開されている。これでは日頃掲げてきた社会主義の理想像は絵空事になってしまうばかりでなく、社会主義や共産主義そのものへの幻想も

跡形もなく雲散霧消してしまうことになろう。

なお筆者は社会主義体制の解体過程以後の世界を、それまでの東西間の双曲体制としてではなく、グローバリゼーションの進展に伴う「一つの世界」への収斂化としてとらえてきた。ここではロシア、中国の市場経済化—実は自己流資本主義化—の過程を産業革命に先立つ資本主義の「本源的蓄積」と独占資本主義の勃興と軌を一にする「植民地原蓄」に続く、資本主義の第三の「グローバル原蓄」としてとらえている。それが原蓄であるのは、社会主義体制下で「共有財産」として人民が生み出してきた莫大な富を特定少数のエリート集団が我が物とし、それを原資に資本主義化を進めてきたからである。そしてグローバル化による資本主義の拡大・深化、つまりは一つの世界に参入し、その中で頭角を現そうとした。他方で西側世界は、これを自陣営内に包摂しようとしてきた。したがって「同床異夢の世界」にある両者が対抗と協調のバランスを維持しているうちは良いが、対立一辺倒へと傾斜しすぎると、この枠組み自体が瓦解してしまう恐れがあるので、どうしても避けたいという戦略的思惑が西側にはある。だが両者の離脱と対抗への傾斜は、覇権国の地位が揺らぎ始めたアメリカにとって、同様の傾向をとりつつある途上国の資本主義化の別の道—たとえばグローバルサウスなど—の模索と並んで、軌道修正を図るべき焦眉の緊要課題になっている。もし中国が新たな覇権国としてアメリカの代替わりを成し遂げるか、そこまではいかないまでもアメリカと十分に拮抗できる二大超大国の地位を確かなものにしたたり、途上国が「グローバルサウス」として西側世界から距離をおいたり、あるいは離脱するようにでもなれば、アメリカのみならず西側世界が壊滅的な打撃を被りかねない。しかも盤石と思えた覇権国アメリカの足下は大きく揺らぎ、IT化による情報産業と金融サービスにこそ優位性を維持しているが、製造業（自動車はおろか航空機までも含めて）は大不振である。その背景にはアメリカの覇権の先兵として大きな役割を果たしてきたアメリカの製造業多国籍企業が、西欧、日本での同様の多国籍企業化の進展や、さらに NIES（新興工業国）や近年は中国、インドなど新興国の経済発展を受けて、海外直接投資（FDI）に基づく海外子会社方式ではなく、現地企業との提携路線（Non Equity Mode, NEM 方式）へと主軸を転換した。そのためその支配力・影響力は間接的にならざるをえない。いわゆる「平準化」（フラット化）世界の進展と波及である。こうしたことの結果、「ゼログラビティ」（無極化）とはいわないまでも、日本の低迷はあるものの、EU—とりわけドイツの台頭によって西側世界は「一枚岩」ではなくなり、それぞれの道を模索する、いわば多極化の道を歩もうとしている。GDP で測れば、2023 年には米、中、独、日の順になっていることがその証左である。またインドが中国を抜いて世界最大の人口国になり、かつまた米、露（旧ソ連）、中に次いで 4 番目の月への到達を実現して、宇宙開発でも最前線に躍り出ようとしている。なお日本は遅ればせながら 2024 年 1 月 20 日に月面到達し、さらに 2 月 17 日には H3 ロケット 2 号の打ち上げにも成功して、5 番目の宇宙開発国に名乗りを上げ、精緻な月着陸技術と観測、それにコ

スト節約的な往復費用という、身の丈に合った独自の宇宙開発路線を進もうとしている。

頃は良し。途中で頓挫していた私流西遊記論を再度掘り起こしてみようと思い立った。ディストピア（宮廷内革新運動の挫折）という現実から立ち直り、心機一転してユートピア（天竺）を求める旅へという諸星流『西遊妖猿伝』の基本モチーフを下敷きにして、自己流の西遊記論を構想してみた。その枠組みは以下のようなものである。天上の話は、諸星流『西遊妖猿伝』のアイデアを借りて、これを大唐帝国の宮廷内の改革運動の話とし、「ユートピア」を目指して、政治的改革を試みた青年は失敗し、地下牢に閉じ込められる（ディストピア）。次に外部からの手引きによって地下牢から脱獄した青年は、その際の条件である天竺に経典—理念上の最高のテキスト—を探しに行く高僧のボディガードの役割を勤めることを承諾する。そして外部世界での幾多の困難を克服して、仲間と助け合いながら、自らも成長しつつ目的を達成していくという、艱難辛苦の末に成功を収めるサクセスストーリーである。悟空は政治的リーダー、猪八戒はたまたま一行に加わったごく普通のノンポリ、沙悟浄は外部の異国人、そして白馬（竜の化身）はこれらを黙って監視し、かつ上層部に逐一報告する秘密諜報部員という設定で、三蔵法師は純粋に教義を信じている求道者—多分に観念的な理想主義者—である。そして外部世界に立ちはだかる妖怪達（黄風大王、牛魔王、羅刹女、火焰童子、金閣・銀閣大王など）は、あるときは外界の苛酷な自然条件の化身として、またあるときは異質な社会に巣くう荒くれ者などを具現している。そして一行がにっちもさっちもいかないほどの難局に遭遇すると、全てを見通している天上世界（釈迦）から適切な指示が下され、その難局を乗り越える。そうすると、全ては予定調和の世界の中で登場人物があたかも「釈迦の掌（てのひら）」で踊る操り人形のように行動する「円環運動」—転生輪廻—に収斂されてくる。現実には権力を握っている者達は少なくともこうした枠組みとストーリーを好んでいるのは確かである。だがわれわれは絶対にそうではない。ここから別の道を模索している。

以下ではこの私流『西遊記』解釈を基に、人類が昔から夢見てきたユートピアの理想とそれが打ちひしがれていく現実のディストピアとを対比させながら、現下のIT革命という新事態のなかでの内容の変化を考えてみたい。それはこれまでの世界観や改革運動への反省を迫ることにもなろう。そして21世紀の新たなユートピア像の再構築にも繋がるだろう。もとより筆者は生命科学はおろか、自然科学についても全くの素人であり、門外漢である。また哲学に関しても一知半解的な好事家の域を出ない。この門外漢・素人が敢えて疑問を呈する危機意識に免じて、ご高察願いたい。以下はその妄想・妄言の一端である。ご笑覧あれ。

## II

筆者が『西遊記』を好きになったのは、まだ見ぬ世界を旅するその冒険心、探究心に刺激さ

れたからである。15年ほど前にはじめてイスタンブールを訪れたとき、「ああッー」ここが東洋の終わりで西洋の始まりにして、ロンドンから続くオリエント急行の終点なのかと、改めて感慨に耽ったことを思い出す。西洋と東洋という隔絶しているかに見えた異空間間を結びつけた、シルクロードを開いた先人達の壮挙とらくだに乗ったキャラバンの幻想的な姿が思い浮かんだ。今はレストランに改築されたターミナル駅舎で、しばし空想を楽しんだ。もっとも実際のキャラバンの旅はそんなロマンティックなものではなく、困難で苛酷なものであった。砂漠の中に点在するオアシスを巡っていくことになるが、そこで水を補給できるが、常時給水ができるように彼方の山脈から流れる雪解け水を引いたカレードと呼ばれる地下水路網が至る所に張り巡らされ、その整備が手間暇かけておこなわれていた。またオアシスは遊牧と農業と手工業と商業の結節点で、そこに局地的な市場圏が形成されて、特産品や日用品・食料など隊商の便宜が図られた。さらには情報交換と異文化間の交流も盛んであった。もっとも不測の事態に備えるべく、盗賊等の襲来に備えて隊商は武装していたし、行く先々の旅籠は頑丈な石の塙で囲まれた一種の小要塞風であった。そのいくつかをトルコ国内で見学した。こうした現実の厳しさはひとまず脇に置いて、幻想的な想像を膨らませて、三蔵法師一行の天竺に向けた旅物語である『西遊記』のことを改めて想起した。わくわくするような高揚感と好奇心に満ちた冒険心を誘うものである。こうした子供心を刺激した読み物としての『西遊記』ではなく、これを人類のユートピアを目指す夢物語として再考しようと思いついたのは、上述したように成人してからのことであるが、このときのイスタンブールへの旅がその促迫要因にもなった。

人類は昔から、洋の東西を問わず未来社会への夢を育んできた。こうした理想郷の夢は一般にユートピア思想と呼ばれるものである。その背景には科学技術の未発達や生存・生活の厳しさ、さらには予期せぬ自然災害の度重なる襲来、そして厳しい身分差別や抑圧的な政治支配などの苛酷な現実があった。こうした苛酷な現実を一時的に忘れ、未来の「楽園」や「極楽浄土」に自らを託そうとする人々の切実な思いは、多く宗教的な装いを帯びて、「心の問題」として敬虔な信仰心と結びついてきた。後に宗教的権威が圧倒的な影響力を持つに至ると、理想郷は「あの世」の問題として、空想の世界の中でのみ羽ばたくようになる。一旦生を受けた以上、いずれ死は免れえない。これは人間ばかりでなく生物全体にとって避けて通れない宿命であり、誰もがいつか死を迎えることになる。このことの受け止め方は世界中で同じではない。我が国では自然現象の一つとしてこれを見て、無常観という、割と覚めた感覚で捉えることもある。とはいえ、人間の死は本質的には悲しいことなので、その救いを宗教に求める気風が万国共通にある。ここからもっぱら現世を忘れてあの世に救いを求める傾向や、その反対に極端に現世での快楽を強調する傾向もあらわれるが、いずれも一面的にすぎる。まっとうな宗教は生と死の両面を考え続けてきた。我が国の仏教でも古の高僧が、人間はこの世に生を受けてまず「息を吸う」ことから始め、そして「息を吐く」ことで人生を終えると喝破している。命とこの世

との関わり合いつまり三次元空間に加えて時間軸を足した四次元的世界—を象徴している事象である。だからどんな困難にあおうとも、自分と仲間—身内や周辺にいる善意の人々の力を信じ、助け合って懸命に努力して生きていくことが何よりも大切である。これはごく普通の、誰もが共感しうる教義である。そして生きていく途上では、成功ばかりではなく、多くの失敗や間違い、場合によっては犯罪まで犯すこともある。それを悔い改めるのもまた人間の力であり、その内在的な力が育ってくるように自らを処し、周囲もまたそれを暖かく見守っていくことこそ大事になる。「況んや悪人をや」である。

かつて2013年に「ライフ・オブ・パイ トラと遭遇した227日」という驚くべき内容の映画を見たことがある。動物園を経営していたインド人家族が動物をつれてカナダへ船で移住する途中、嵐に見舞われて船が転覆し、少年は救命ボートにすがりつく。そこにはオランウータン、シマウマ、ハイエナも同乗していたが、それに加えてなんとベンガルドラマでが潜んでいた。そしてハイエナがオランウータンとシマウマを殺し、そのハイエナをトラが殺してしまう。少年はその恐ろしいトラと対決・対峙・そしてやがては共生しながら、227日もの長きにわたって、大海を漂流し、最後にメキシコに漂着する。そこでトラはいつともなく姿を消し、少年は病院に収容され、回復後、その驚異に満ちた227日の漂流生活をこの物語の作者に語るというものである。これはカナダ人が書いたベストセラーが原作で、「ブロックバックマウンテン」でアカデミー賞を取ったアン・リーが監督している。映画はこれを驚異に満ちた大洋航海ストーリーとして描いていて、他の解釈の余地をいれていない。観る人の判断に委ねている。だが私はこのストーリーの背後にある真意を次のように解釈する。一種の擬人法で、ハイエナは悪人のコック、足をくじいたシマウマはその仲間、そしてオランウータンは少年の母親で、母親と仲間を殺したコックを少年がトラのような凶暴な本能をむき出しにして殺し、その心を静めるために227日もの長期間にわたって、大洋を漂流し続けた。ここで描かれているのは、少年期に特有の、殺人までも犯しかねない猛々しい凶暴な本能（トラに具現化）と、自然の中でオーロラを見たり、満天の星空に夢を馳せる純真な心との葛藤と、それが後者に収斂されていくまでの少年の精神的成長を見つめた時間劇である。大海と大空に象徴される自然が罪を犯した少年の心を慰め、洗い清め、そして立ち直らせる力になり、それができたとき、凶暴なトラは身内からでていき、どこかに姿を消し去るというものである。この映画は今になっても心に残る忘れがたい映画である。人は勇気を持ってことに当たり、不幸にして罪を犯したときはそれを悔い改め、正常な心を取り戻すために時間をかけて自省していく。青少年期の魂の葛藤と彷徨を描いたこの映画は、教訓と感動に満ちた忘れがたい印象を私の胸に刻み込んだ。

宗教は個々人の波瀾万丈の生涯に寄り添い、その喜びも悲しみも、あるいは栄光も挫折も飲み込んで、どこまでも人生を生き抜く勇気を精神の内部から沸き上がらせる、いわば「人生の伴侶」であり、それを仮に神と総称し、その内面的な力を信ずる心を信仰と称していると、私

は勝手に解釈している。だがこうした個人の未来への肯定的な夢としてではなく、社会全体のこの世での実際に実現可能なものとしてユートピアが語られるようになったのは、近代になってからである。貧民救済（孤児や寡婦など）の実際の社会運動の広がりがあるための現実的な土台を作り、かつ基盤を持つようになったが、そうした社会的実践は、後にマルクスとエンゲルスによって一括して「空想的社会主義」と名付けられ、その命名が一般にも流布するようになった。この言い方は多分に自分たちの主張を種差し、際立たせる狙いからのものでもあり、決してこれらの社会運動家達は口先だけの口舌の徒ではない。むしろその反対に極めて実践的な篤志家であり、場合によっては自己の財産までも投げだして社会改革と貧民救済に努めた、高潔な人格の持ち主であった。それは後に社会福祉や社会的厚生 of の考えに繋がっていく。またマルクスやエンゲルスも個人的・家族的には多くの深刻な困難を抱えていて、「空想的社会主義者」を揶揄したりする、冷淡な心根の持ち主だったわけではない。その反対に極めて暖かな心情の持ち主であった。

さて工業化と科学思想の確立、そして市民社会の成立が現実の社会主義運動の前提となり、かつまた強力な後押しとなった。産業革命—この言葉はエンゲルスの造語とも言われている—による機械制大工業の誕生と興隆は、その担い手としての産業資本家と、それとは対極にある賃労働者という新たな階級を両頭にして、強力に推進された。そしてこの機械制大工業の発展には、宗教的な権威からの近代科学思想の離脱があった。マルクスとエンゲルスが力を込めて力説した「科学的社会主義」の思想と理論は、唯物論と弁証法という独特の世界観と論理学に裏付けられたものであった。それによって、ユートピアは空想ではなく、現実的基盤をもつようになる。そのため、マルクスとエンゲルスはそれ以外の社会主義思想やその実践・実験活動を上に述べたように「空想的社会主義」として峻別して、それと自らの主潮との間に一線を画した。そして先進的な国際的な労働運動（インターナショナル）の中核を担おうとした。それほどに自己の流儀に自信を持っていた。とはいえ、それは科学の発達と歴史の法則に則って自然のうちに自動的に実現されるものではなく、労働者階級を中心にした「プロレタリア革命」によって達成可能となり、そのための前衛組織としての職業的革命家集団によって先導されるという、斬新かつ画期的なプログラムが作られるようになる。これを特に意識したのは、ロシア革命を実際に主導したレーニンであり、彼はそれ以前のカウツキーの「前衛党」論を自然成長論だと批判して、ボリシェビキ党の目的意識性を強調した。それは1917年のロシア革命の開始時の「遠方からの手紙」から「国家と革命」に至る13本の著作<sup>6)</sup>に集約的に表されていて、そのカウツキー批判は徹底している。事実、2月革命時にはわずか数千人にすぎなかったボリシェビキ党は10月革命時には百万人にも膨れあがるという大成長を遂げている。

こうしたマルクス主義者のユートピア像は、一言で要約すれば、物質文明の発達によって、資本主義が社会主義に転化する物質的基盤が作られ、そのための変革主体がその内部から育つ



というものであった。近代的工業化を背景にしてその生産力の発展が社会主義への道を開く前提となり、その担い手としてのプロレタリアートとそれを先導する革命家集団が社会主義から共産主義へと発展する人類史の中核になると宣言した。一言でいえば、物質文明史観に基づくユートピア像である。それは上述の唯物論と弁証法に基づく科学と思想との関係のとらえ方にも一貫して流れている。たとえばレーニンが1905年の第一次ロシア革命後の反動期に書いた大著『唯物論と経験批判論』<sup>7)</sup>において、マッハやアヴェナリウスをはじめとする当時高名な科学者や哲学者達が人間の精神や内面の科学的解明に関心を示しはじめ、それがロシアの革命家やその周辺—たとえばボグダーノフの『経験一元論』など—にも人間の心の問題へと関心が移っていくことに強い懸念を示して、そうした偏向を観念論と神秘主義への拝跪と強く批判した。そこには近代科学が支えとなった物質文明への強い信頼がその底流にあった。こうした唯物論的世界観・哲学観とそれを歴史に応用した歴史的唯物論の考えが、新興の社会科学ばかりでなく自然科学をも包摂する全体を支配しているという信念が、マルクス主義者の心底にある。そして哲学的観念論や唯心論を批判し続けてきた。モノ（物質）の存在を基本に据え、その構造と運動と変化の法則性を実験と観察と推理によって解き明かそうとするその基本姿勢は唯物論の強みであり、弁証法はそのための論理方法として有効であった。したがって、自然科学を中心にして科学的思考法や世界観が盛んになっていく中で、これらが有力になっていくのは理解できる。そのため「物質概念」の精緻化に異常にこだわり、観念論との違いを際立たせようと努めた。こうした志向性はエンゲルスの中に顕著であり、レーニンはエンゲルスの『反デュリング論』<sup>8)</sup>などを土台にして、それを受け継ぎ、敷衍させる形で、上記の著書を書いた。

この考えは、近代工業化社会の誕生と物理学や化学などの自然科学や工学に中心をおく科学思想の台頭を基礎にして、それを社会科学—とりわけ経済学と歴史学—にも応用しようとするものである。社会科学と自然科学を貫貫する共通の思想と思考方法を探し出すという努力は正当なものであり、今日マルクス主義と総称される思想の優れているのは、この追求を首尾一貫しておこなったことにある。ある意味では歴史を含めて社会科学を「科学」—単なる英雄譚や事件史ではなく—に値する地位にまで押し上げ、それを現実の社会変革と結びつけたのは、マルクスとエンゲルスの最大の功績だといっても過言ではないだろう。とりわけ魅力的なのは、主体としての人間の能動的な営為に積極的な役割を与えたことである。哲学者や教育者達は世界を様々に解釈してきた。だが大切なのは「教育者自身が教育されねばならないこと」だという、マルクスの名言がある。そして今日では自然科学や社会科学はもとより、「人文科学」と総称される—この呼称には筆者は多分に違和感を感じざるをえないが—その他の学問や、さらに芸術分野や体育にまで、こうしたマルクス流の世界観（唯物論）と手法（弁証法）が幅広く浸透している。そしてマルクスとエンゲルスはそれらの大本としての地位を与えられている。その延長で特定のイデオロギーが科学・学術・芸術・パフォーマンスアーツやアスレティック

スの全てを支配するという極端な偏向がまかり通るようにもなる。たとえばその中枢にある唯物論を強調するあまり、それとの対比で観念論や唯心論を否定し、かつ「物自体」つまりは物質—の存在は認めてもその解明困難を宣言したカントを折衷論者・不可知論者として、その不徹底さにまで批判の追求をやめなかった、上記レーニンの『唯物論と経験批判論』は大変な力作で、首肯すべき多くの着眼点や卓見がちりばめられているとはいえ、全体の論調は「弁証法的唯物論」の正当性を強調する余り、今日からみると、いささか行き過ぎを感じざるを得ない。ポリシェヴィキ党の結束と主導的な役割を強調したいという歴史的制約性が招いた極端な行き過ぎだったといえようか。

だが物質と精神とは二項対立のかつ両立不可能なものではないし、ましてや人間もまた物質—最高度に発達を遂げた—の一部であることを根拠にして、前者によって後者が包摂されるというものでもない。たとえば、感情や心情から始まり宗教や人生観などの個人の精神面の問題と、それと社会全体の問題、あるいは思想と科学との関係などは、それぞれの固有の存在価値と根拠を持っていて、あるときは反発や対抗したりし、またあるときは相互に協調し合い、かつ相互浸透し合いながら、並存して進んでいくものと考えの方が無理なく全てを見渡せる。そして対抗・対立ではなく、その総合性・融合性に視点を移すことが、21世紀の今日の人間社会と科学の発達に関わっているのではないだろうか。一言で言えば、あらゆる思想や学問はそれぞれに相対性と歴史性を持っていて、完璧でないばかりか、万能でも普遍的でもあり得ない。無条件に成立するのは、「真理がある」ことぐらいで、それ以外は全て条件的であり、われわれが追求しているのは、それに限りなく近づく漸近線、つまりは相対的真理であって、絶対的真理に同化することなどはまずないと真摯に告白したのは、レーニンその人であった<sup>9)</sup>。その謙虚さを忘れてはならないだろう。人間の思考はその時々歴史的制約性に縛られていて、それ以上のものではない。それを自覚しながらも、時代の先頭をゆく先覚者はどこかでそれを越えた普遍性を合わせ持つことがある。そして未来への光明を照らし出す灯台となりうる。この意味合いを後世のわれわれは改めて再確認しておこう。

ところで、21世紀のIT革命—この言葉を工業化を体現した産業革命に対比して筆者は使いたい—の今日、われわれが日々見ているものは、それとは異なる土俵の登壇である。かつて産業革命を推進した物理学や化学、さらには工学に代わって、ゲノム解析が扉を開いた人間自身の内部—とりわけ脳—に係わる科学的解明は、物理学や化学から生命科学へと中心がシフトされてきていることを示している。したがってわれわれはこの現実の中に身を置き、そこから21世紀にふさわしい科学観を身につけ、これまでの近代的な科学観や世界観を創造的に発展させねばならないだろう。これは、マルクスやエンゲルスが彼らに先行する幾多の賢人達が切り開いた世界観と論理学を一部で継承し、また一部では大胆に乗り越えて、独創的な卓見を生み出したのを否定するものではなく、それらを条件的に考えて、その限界を承知した上で、そ

れを基礎にしてさらに豊富化させていくものである。一言で言えば、生態系（エコシステム）重視の考え方へのパラダイムシフトを図ることである。それは事物の相互関連と総合性を重視するものの見方であり、単線的なものではないという意味合いで「複雑系」という呼び名で表されたこともある。物質概念へのこだわりは、その硬直的で機械的で単純化された枠組みを固定化させ、加えて科学と思想を一体的に扱い、特定思想による科学の包摂化という粗雑さや、そこからくる自己弁護を明らさまにしてしまった。それでは多くの真摯な科学者や学術研究者たちから敬遠・忌避されるだけである。また一般の人々の同意も賛同も得られないだろう。そのことを何度も強調するのは、こうした固執や極端な硬直化が、全てを集約し主導する政治運動やさらには政権奪取後の統治にまで強引に貫かれることが度々起り、大いなる弊害ばかりか、反時代的な後退にまで至った例が多く散見されるからである。それではせっかく盛り上がってきた「草の根」運動の足を引っ張ることもなりかねない。何よりも大事なのは、民衆の下からの要求と運動と創意・工夫である。革新的な政治集団にはその頭脳中枢としての集団のもつ多彩で多能で先進的な能力を十二分に発揮して、これらの要求と創意性を巧みに組織化し、領導していくことが強く求められている。それには徹底した民主主義と対等平等な基本的権利の保障、かつその上で透明性と説明責任を果たしていくことが求められる。そして根本的な政策変更を求める実現可能な代替案（オルタナティブ）を提起しつつ、事態の推移に応じて柔軟に対処し、その行く末の道標を明示していくことである。それは件の『西遊記』において、道を誤った悟空に対して、三蔵が原理的で観念的な説教を垂れるが、悟空が納得せず、何度も一行から離脱しようとし、お釈迦様の滋味溢れる仲介と裁断によって元に戻るという筋書きを彷彿させる。だがそれが予定調和的な「釈迦の掌」から脱して、自らの創意と自由意志に基づいて未来を創り上げるストーリーに変えられなければ新たな命は吹き込まれない。これは一大壮挙である。

この点で忘れられないのは、2019年に日本で上映された『ニューヨーク公立図書館 エクス・リプリス』（F・ワイズマン）というドキュメンタリー映画である。定評ある高名な監督によるこの映画は、アメリカの草の根の民主主義の広さと深さを再認識させてくれた。資金の半分を公的資金、残りの半分を民間からの基金（ファンド）によって運営されているこの図書館の運営の実態を描いたものだが、館長など指導部による基本方針の提示とそれを巡るスタッフからの意見と討論、そして最終決定に至る過程がつぶさに描かれていた。参加スタッフからの疑問や意見具申—場合によっては対案の提示—にたいして誠実かつ丁寧に指導部が答え、結論が得られないものに関しては持ち帰って修正を加えて再提案するか廃案にし、粘り強く討論を重ねて全体の合意を得られるように真剣に努力していく様子は、これぞアメリカ民主主義の原点であり、今に続く伝統でもあると改めて納得させられた。というのは、私自身大学のスタッフの一員としてこうした会議と合意形成の経験を彼の地で持っていたことがあるので、そこでの

経験と同じものを感じたからである。そして最終的には必ず賛否を問い、投票結果を議事録に残す。そして実行ということになる。なお原案に反対の際にはその旨を議事録に銘記することもある。さらに企業においては方針の実行が成功を収めた際は、賛成した幹部にはボーナスが支給されるが、反対に回った幹部にはそれが見つからないという慣行のところもあると聞いたことがある。営利を目的とした企業と非営利団体である公立図書館では目的が異なるので、そうしたことは起こらない。公立図書館の目的は利用者への便宜（サービス）を最大限に向上させることにあり、そのために少ない予算を最大限有効に使うための予算配分と、館員に過度の犠牲を強い、無理のない実施に心がけている。そしてその成功を基本にさらに多くの資金を集めていく努力を重ねる。ここでの参加者が少数意見であることに臆せず、堂々と意見を述べ、討論していく様子や、指導部が誠実にそれに答え、場合によっては提案を引っ込めたりする大きな度量は見事でもある。そうした姿勢が指導部の力量や信頼のバロメーターともなる。それぞれに自説を堂々と開陳しつつ、全体としての合意を作り出そうとする共同営為とその土台となる民主主義の発揚に改めて感心した。

この映画には様々な行事や活動—たとえば外国からの移住者に対する英語教育や学校教育が十分でない住民へのパソコン教室、それに分館を通じてのこまめなサービスなどが紹介されているが、とりわけ印象に残ったのは、リンカーンの奴隷解放令にたいしてマルクスが激賞した手紙—実物をこの図書館が所蔵—を例にした講演であった。そういえばマルクスは「ニューヨークタイムズ」紙の寄稿者であったと、そのとき思い出した。またこの公立図書館は地域住民ばかりでなく、広くアメリカ人ならびに世界中の人々にもオープンにされていて、とりわけ映画に関わるものは、個人の書き込みのある出演者の台本や創作ノートまで集めていて、スピルバーグなどがここの図書館を頻繁に活用していることも紹介されていた。さらに特別研究員制度も設けられていて、選ばれると、1年間デスクを与えられ、自由に書庫に入り、利用できる便宜を享受できる。これに「応募してみたいなあーッ」という希望をその時抱いた。この映画が描いているものは、図書館が「知の宝庫」として果たしている崇高かつ貴重な役割である。われわれの知的創造活動は図書館のもつこの機能と役割によって、飛躍的に向上した<sup>10)</sup>。そして今はデジタル時代にふさわしい図書館機能が追求されている。

資本主義的生産・分配システムは今日大いなる曲がり角に来ている。工業化が牽引した枠組みの中での成長率の鈍化と長期の停滞、それと対照的な GAFAM に代表される新興の情報巨大企業の際だった高蓄積が目立つようになり、その結果、産業構造の極端な偏りや貧富の格差などの諸矛盾が際立つようになった。このことは、資本主義経済システムが急成長を遂げるには新興の成長産業を先導者・牽引者にして、不況と活況の荒波を乗り越えて発展を遂げるという点では類い希な活力を持っていることを証明したが、決してその力は万能ではなく、歴史的限界も帯びている。その結果、資本主義の下で理想を求めるユートピアの夢はかつての工業化

社会時ばかりでなく、現代の知識資本主義時代においても無残にもしぼんでしまい、落胆の末のディストピアに陥るといふ苛酷な現実だけが残っていくことになる。

このことは、別様に表現すれば、ユートピアとディストピアは実は表裏一体のものであることを含意している。科学・技術の発達に促された生産力の発展は、この世にユートピアを実現できるだけの物質的基盤を生み出している。またそこから生まれる余暇の拡大は個々人の多様で多彩な才能を開花させる可能性を開いた。だから知識創造の力に依拠して、工業化時代を超えるさらに豊富で実り豊かなユートピアを構想し、かつ実現できる土台はすでにある。そしてそれを分配においても活用できているところでは、共創・共働・共営・共栄の社会（共同体）を部分的・局地的にはあれ実現できることにもなる。そして自由・平等・友愛という世界人権宣言に盛り込まれた人類共通の価値観は、自然災害、地球環境の悪化、戦争と紛争、劣悪な生活・生存条件の残存と著しい格差の出現、さらには様々な差別の残存や増幅という状況下で、人権と平和を求める新たな連帯の気風と運動を飛躍的に高揚させてきている。この力を信頼すべきである。それは人間性の全面的な開花に向けた新たな可能性を開くことになる。そしてそれぞれに固有の存在価値を持った各分野の新たな多面的な開花を促し、かつ個性に合わせてそれらを掴み取る全面的な人間への成長こそが21世紀の新たな総合性の意味合いである。そこで次節では21世紀の新たな地平の意味に関して少し論じてみたい。

だが今日、このグローバルな資本主義経済システムの土台の上に盤踞している政治・統治システムはもっと混乱し、腐敗し、大衆的な同意と共感を得られなくなり、姑息な弁明と保身、そして上からの強制とデマゴギーが支配的になっている。ロシアの対ウクライナ侵略に対して、西側世界は上げて反対し、ウクライナ支援をおこなっている。ところが肝心のアメリカはかつてのように率先して先導するどころか、国内で共和党の反対にあって追加の支援資金を出し渋り、遅延した結果、ウクライナは効果的な反撃をできず、後退のやむなきに陥っている。その一方でイスラエルの無慈悲なガザ侵攻にたいしては、開戦とともに真っ先にイスラエルを訪問して、反ハマス路線をとってこの侵略への事実上の同意を与えた。侵攻が凶暴かつ無慈悲になると、さすがに賛同はできないので弱々しくその行き過ぎに懸念を表明しているが、積極的に停戦に向けたイニシアティブを執ろうとしてはいない。しかも停戦に向けた国連決議に拒否権を発動し、加えてG20の会議などでも停戦を求める大勢に異を唱えている。これらの一連の動きを見ていると、アフガニスタンからの突然の撤退にはじまるアメリカの覇権の「黄昏の時期」がいよいよ現実化してきていると思わせざるを得ない。その最大の要因は国内での不協和にある。民主、共和両党がバクスアメリカーナという価値観を共有しつつ「仲の悪い兄弟」であった時代は過ぎ去り、両者の深刻な対立・反目と性格変化が浮き彫りになってきた。その背後には国民諸階層、とりわけ伝統的にアメリカ社会を支えてきた幅広い中間層、なかんずく勤労者階級の貧困化と階層分化によって第二次大戦後の世界を先導したアメリカ的価値観の衰

退が起こっている。社会的混乱と分裂、そして秩序の退廃と崩壊である。加えてその空隙をついて黒を白と言いくるめるデマゴギーや相手に対する口汚いフェイク攻撃が一部でまかり通っている。これに対して人権と環境保護と生活向上と民主主義を希求する「草の根」運動がかつてないほどに広がりをもってきている。今や既存政党の旧来の教義を乗り越えようとする、民主主義の土俵上での国内の熾烈な主導権争いがいよいよ佳境に入ってきた。

さらに付け加えれば、資本主義経済システムとその土俵上で展開される市民社会の政治的統治システムとは同じものどころか、一体でもない。これまでは比較的安定した秩序の下で、両者は相対的に独立し合いながらも大局的には照応し合ってきた。だが事態は益々両者の乖離の方向に向かっている。したがって、現在ある政治システムを打倒しても、資本主義経済システムがすぐになくならないばかりでなく、またなくすべきでもないだろう。なぜなら資本主義の本来のシステムが十全に機能していないからである。むしろ現在は統治・政治システムの破綻と危機の方が際立っている。だから資本主義の行き過ぎや偏向から起こる格差的で、抑圧的で、独占的で、反民主主義的部分をなくし、個人の意欲—いわば起業家精神—の尊重と自由で公正な競争の組織化、適正な予算配分や合理的かつ民主的な運営の成長・成熟を促し、市場の発達を促進すべきである。つまり公平、対等、互惠、民主主義を拡大・普及させる方向へと大きく舵を取ることである。そうすることによって、資本主義経済システムを本来の方向に発展させる余地が開かれる。そのことを強調するのは、資本主義に代わると自認する社会主義の実践においても、資本主義経済の中にある次代にまで続く普遍的な要素が十分に育っていくように誘導せずに、それとは断絶的な社会主義「計画経済」政策などを性急に進めた結果、混乱・頓挫してしまった例を数多く見たからである。またそこからの反転が、強権統治システムだけを残して、自己流資本主義経済システムの暴走に走っている。またアメリカでの革新と保守の争いは資本主義システムの修正・発展を目指す方向と、それに待ったをかけ、資本主義の本来の原理に立ち戻れという志向との間の人々の考えの違いを元々は基本にしていた。それが保守と革新を分けていた。そして資本と労働との間のバランスがとれていた時代はともかく、資本が巨大化し、その支配力が圧倒的になるにつれ、労働側の衰退とそれに伴う一般大衆の民主的基盤も後退してしまった。これを打破しようとする草の根の民主主義運動が人種差別の撤廃やLGBTに代表される性差別撤廃などとして噴出する、新たな高揚期を迎えている。もちろん、資本主義の経済システムを本来の方向で進めていっても、やがては限界にぶち当たらざるを得ないこともまた確かである。だがその限界にまで各国民の同意をえる形で進める息の長い「見立て」が大事になる。そこから未来の経済システムへの多様で多彩なアプローチが生まれてこよう。とりわけ、政治はあらゆる要素の集約点であり、経済や文化などを主導する地位にあるので、その変革は特別に重要な役割と位置を占める。

### III

前節で述べたように、「物質」と「精神」を二項対立的にみて、唯物論と観念論を峻別して、唯物論の優位性を強調する考えは、19世紀の物質文明の興隆とともに花開いた考えで、その有効性の多くは20世紀までであって、21世紀の今日にはそのままでは通用しない。工業化文明がその一面的な行き過ぎによって、人間の内面的な悩みや精神の問題をより深刻に浮上させ、心の豊かさを取り戻す様々な試みや人間の精神の科学的解明が急速に進んできた現実がある。それは今日極めて切実な要求になっている。人間の精神的な側面の自然科学的な解明の扉を開いた生命科学の急速な発達、さらに高度な次元での物質と精神の統合と融合を求め、そして現実にもそれを可能にしている。ここでは一個の生態系（エコシステム）として万物をとらえ、その共存と相互関連、自然的調和が大事なポイントとなる。人間の心理面での心の動きや精神面を解明するものには、従来から心理学などがあったが、それはあくまでも質問と観察に基づく間接的な推理・推察を基本にしていて、脳自体の生理学的な解明を通してではなかった。その壁が今や取り払われようとしてきている。精神面での悩みの基底には脳内に堆積されたマイナス因子による様々な機能障害があることが判明してきた。物体（生命体）としての人間の病気・機能障害を治療する技術はIT化を取り込んで飛躍的に進んでいる。遺伝子治療はもとより、内視鏡による人体内部の直接的な観察や電子メス等を使った無人手術、人工臓器による人体の部分的な置換や臓器移植に加えて、AI（人工知能）の開発と発達は、人間の知的能力と作業（労働）の代替をロボットが果たすばかりでなく、本人とは別のアバター（分身）作りにまで敢えて踏み込もうとさえしている。いわば生命科学が「造物主」の役割を果たそうとするかにさえ見える。かくして生命体としての人体を客観的に扱い、その生命の維持と回復のための治療・治療手段が飛躍的に進んでくると、それと同時に精神的な面での安心と平穏をも得たいとする願望も強まってくる。健康と長寿と美容への希求である。人の世の至高の望みを中国の古語で「福祿寿」と言うこともある。福は子孫、祿は財産、そして寿は長命を表すとされるが、現在の日本では福と祿が尻すぼみして、寿だけが伸びている。この不均等を正すことが、単に長生きするだけでない人生の「安心立命」を保障するためには是非とも必要になる。したがって、全ての人々にセーフティネットの網がくまなく張り巡らされるような社会の出現が待望される。それは現代におけるユートピアの実現の一部である。そのためにも科学と思想を峻別し、それぞれの立つ位置を尊重し合いながら相互浸透を促して、精神面でも肉体面でもその豊富化を図る営為が大事になる。そこでそのいくつかの点を考えてみよう。

一つ目は「知の時代」の到来がもつ新しい意味合いである。それは武（F、軍事力）や富（W、経済力）中心から知識（K）へのパワーシフトであるという論調が国際関係論などで一時期喧

伝された。だが知をパワーの一つとして考え、知を知財として商品化し、その独占による特別の利益獲得を目指すのではなく、共働（コラボレーション）して共創（コクリエーション）した成果を人類の共通の財産として、これを共有し、共通に利用して、共栄を図る道こそが知の本道である。つまり共創—共働—共営—共栄の連鎖の確立である。トフラー流のパワーシフト論<sup>11)</sup>ではなく、万人の共通財産に作り替える営為の中にこそ、新しいユートピアの種が眠っている。知は本来的に平等的で平和的で協調的な性格を持っていて、そこには普遍的かつ未来的である要素がたくさん詰まっている。つまり普遍性を持つ知の前に全ての人が平等で、個人の特性に合わせた切磋琢磨を磨き、協同して創造していくことを共通の規範にしている。人間の創造性を大事にし、宇宙開発という極大の世界から生物のゲノム解析という極小の世界に至る、万物のあらゆる構造と運動を解明する崇高な使命と役割をしっかりと自覚し、それを最大限に活用すべき絶好の時代が到来した。これは人間の基本的人権をくまなく認め、平等化を進める人類史の新たな時代の到来でもある。そのためには知の時代にふさわしい知力の発揮を保障し、増進させる仕組みを構築していかなばならないだろう。それが21世紀のユートピア像の基本になる。なおそのことは知的創造活動をすべて共通のインフラにすべきであると主張しているわけではない。個人の創造性を尊重し、私的に所有すべき部分とパブリックドメインとして共通財産にする部分とを正当かつ公平な基準に基づいて区分けし、それぞれの立ち位置を明確にすることである。そのことによって過度の独占やその反対の無断での模倣と剽窃し放題といった倫理観の欠如と弊害を避けることができる。それは知的創造活動の自由な飛翔と集団的営為の促進、そして個人と集団の調和ある共存・共生を進めることになる。

さて知には大きく分けて一般知（教養知、人生知、社会知）、専門知、そしてそれらを総合し、かつ領導する叡智の、三つがあると筆者は考える。われわれが生涯を通じて身につけていくものはまず人生知である。それは人生を生き抜いていくために極めて大事なものであり、個人が社会生活を送る中で、艱難辛苦や血の滲むような人生経験を通じて身につけていくものである。したがって人生訓などとして個々人によってその内容は個性的・個別的であり、それぞれに価値があり、優劣を競うべきものではない。お互いに尊重（リスペクト）し合うべきものである。

次に身につけねばならないのは、職業に応じた専門知である。それは具体的な「モノ」を作り出す能力の陶冶であり、あるいは人と接する際のサービス活動の上達・錬磨である。一般的には技能と総称されるものである。そしてモノ作りの面でこれを身につけた人は、高度技術者（エンジニア）とか高度技能者（熟練労働者）と呼ばれている。それは対象に対する永年の鍛錬や考察を経て身につけていくものである。そしてその上達度・習熟度・経験に応じて収入が決められてくる。したがってまた比較可能なものでもある。なおここで技術と技能の区別をするのは、前者が学校教育などを通じて理解する、物事の仕組みや法則を表す客観的なものなのに対して、後者はその基礎上で現実の労働・仕事の実践や経験の積み重ねを通じて個人の能力



として主体的努力によって身につけられるものだからである。その区別が大事なのは、たとえば生産性の向上といった場合、それが機械体系の充実度や新奇度を表す（技術）のか、労働者の熟練度（技能）を表すのかによって、その内容に違いが出てくるからである。もちろん両者には相互関連があるが、西欧型先進国ではもっぱら前者が追求され、それに対して資本不足などによって機械体系の刷新が困難な日本を含めて後発の国々では後者に依拠して、西欧型先進国に対抗し、かつそれを乗り越えようとさえてきた。それがキャッチアップの実相であった。

なおあらゆる社会は経済活動などの発達に伴って、科学や学術や芸術などの面でその社会に共通の社会知を生み出す。世間知とも呼ばれるが、それはその社会の構成員にとって誰もが利用可能な社会的インフラとなる。したがって各国・各地域の文化的特性や社会的成熟度がそのためのバロメーターになる。またそれぞれの社会がもつ教育システムや独学によって、上で述べてきた知の補完物として広く教養知を身につける人もいる。それは個人々の趣味の広がりや技芸の習得に役立つ。また個人々の専門知をより一層深め、かつ転職などの進路変更にも役立つだろう。

そしてこれらの知の上に、それらを総合する「叡智」とも言うべき、さらに高次な知がある。これは哲学や宗教などと同化されて考えられてきた。中国とその影響下にあった我が国では「仁」や「徳」とも呼ばれてきたが、今やそうした狭いしがらみを脱して、もっと広く、より包括的なものとしてこれを再生すべきであろう。それを筆者は叡智（ないしは philosophy）と総称し、それを具有した人物を「賢者」（philosopher）と呼びたい。それは人々を導く知である。西遊記ではお釈迦さまによって具現化されている。そして各方面での社会的リーダーは単なる専門家ではなく、より一段高い賢者への道を志向すべきである。そうした高みを目指して修行を重ね、自己練磨して、しっかりと身につけないと人々を領導していくリーダーの立場は務まらないと自覚すべきである。

知を身につける方法はもちろん個人々人によって異なり、その深度も広がりも異なる。基本は個人の主体的な努力によって達成可能なことである。したがって主体性をもっとも大事になる。とはいえ、はじめから個人が独学で身につけられるものではないので、先人からの教えや指導がその補助手段として欠かせない。それは学校教育、家庭教育、企業教育、社会教育に大別される。家庭教育や社会教育が劣化してきた我が国では、もっぱら学校教育が偏重され、高学歴と高偏差値が得られれば社会に出て行くためのイージーなパスポートになると短兵急に考えがちである。その結果受験競争が過熱し、それも大→中高→小と低年齢化し、いまや幼稚園入学にまで選抜試験が広がってきている。そのための学習塾がビジネスとして台頭し、授業料に加えて参考資料代や模擬試験代などを含めると、かかる教育経費も益々巨額化してきている。最終学歴—通常は大学—までにどれだけ基礎学力と専門知識を身につけているかではなく、学校の知名度、つまりはブランド力が判定基準になり、ランキングに応じた階差的序列がなされる

ようになる。もちろん高いブランド力を持つということは、伝統などによって表される、過去からの蓄積が積み重ねられてきた結果であることも確かである。だがそれは教育方法や教員スタッフの質、それに運営方針などの総和であり、一律にその上位にある高等教育機関への入学者数や有名企業への入社実績に収斂されていくものではない。だが現状では教育内容よりも就職実績や知名度が優先的な判断基準にされがちである。しかも日本では入学競争は苛烈だが、卒業は比較的たやすいつまりは入りにくく、でやすい構造になっている。そのため企業は学校教育にあまり信用を置かず、入社後の社員教育を OJT 方式によって基礎能力を身につけさせ、有能な社内人材に育ててきた。あるいは学部卒が最終学歴とならずに、その上の大学院卒—それも修士課程ばかりでなく博士課程まで—が求められるようになる。いかに人々の知識欲・学習欲が盛んになり、それに応じた教育機関の大衆化が進んだとはいえ、一部の専門職を除いて、そこまでの専門的力が新卒者にくまなく求められる必要があるのだろうか。その結果は「なぜなのか」という根本的な疑問や広範な問題関心を欠いた、思考能力と適切な判断能力の欠如した、単なる物知りの域を出ない学生の大量輩出に繋がりがかねない。そればかりはなく、こうした高学歴者にして組織の上層に位置する人間の中に、著しく道徳心の欠如した横暴な振る舞いをする輩が目立ってきている。いわゆるパワハラ横行である。

だがこうした教育システムとその上に立つ序列的ヒエラルキーのゆがみは反省の時期にきている。学校教育—むしろ正確には苛酷な受験トレーニング偏重とより上位の教育機関への送り込み競争—と社内教育偏重の日本の教育システムは現在、曲がり角に来ている。産業構造の急速な変化と企業の消長の厳しさ、高級官僚を頂点とする「役人天国」の荒廃、さらに日本とは異質な外国の教育システム・人事考査の進入などによって、その位階的な秩序システムは大きく揺さぶられてきている。加えて、科学・学術や芸術・芸能やスポーツ・エンタメなどの多彩で多様な広がり、欲望の増大に伴うそれぞれの個性に合った分野の開拓と才能発揮を目指す動きを加速化させている。出世や収入よりも達成感や満足度、そしてそのための探求心に喜びを感じる若者層を大量に輩出するようになってきた。そのための知であり技（わざ）であるべきだという自覚も育ってきた。つまり従来の単線的な秩序・教育システムではなく、教育力は個人が主体的に身につけていくものであり、個性溢れるものであって、他との比較によってその優劣を競うべきものではないという複合的な基準の勃興である。その意味での才能の開花を目指して、各自が希望と能力に応じた学校教育を選択すべきだという判断基準がしだいに台頭してきている。そして従来は趣味として学業の外で展開されてきたものが、それ自体が目的に転化するようになった。そこには、「部活」と呼ばれる閉鎖的なサークル内での位階的・性差別的・暴力的で陰湿な構造が次第に取り払われるようになったことも一助になっている。全てがオープンになり、勝利至上主義が取り払われると、スポーツや芸能やホビーやレクリエーションの本来の姿が澎湃として沸き上がってくる。そして愛好者が急速に広がり、普及するように

なる。それは人間性をより豊かにさせてくれるし、生涯にわたってトライし、楽しむ世界を広げることになる。このことの中にも 21 世紀のユートピア像の確かな萌芽がある。

とはいえ、IT 化に象徴される科学・技術の新たな飛躍的発達、それに即応できる高度職業人（STEM）—実は新たな「科学技術労働者」なのだが—の大量要請が発せられている。そのことは科学と技術と労働とをより高次の段階と次元で統一・総合・融合する新たな時代の到来を意味することになり、ここにも新たなユートピア像の確かな芽がある。だが現実には博士課程を修了しながら定職に就けない OD がかりうじて非正規形態での研究継続を余儀なくされる事態が大量に発生している。最高の専門機関が大衆化したら、さらに高次の専門機関をその上に接ぎ木するという即成的で長期視野を欠いた高等教育政策では、さらにいびつな構造を助長してしまい、その結果真剣に研究を目指す多くの若き学徒の大いなる失望とそこからの離脱を呼ぶだけである。多くの貴重な人材の海外流出が増える。そうしたディストピアを招いては人材の浪費となる。

二つ目に知識を生み出すのは人間の創造力にあるが、その内容と質にはいくつかの種類・深度が考えられる。まず第 1 は独創的な知である。それはこれまで確立された知の体系を超えた新たな知の創造であり、画期的なものである。こうした独創的なアイデアや発明・発見は滅多に現れない。通常はそれ以前に数知れぬ失敗例が散乱している。それにもめげずトライにトライを重ねて、ついに画期的な成果に結実することになる。当然に後学の研究者・科学者はそれを尊重し、場合によっては模倣もして、大いに自己の研究の参考とする。通常は自らの研究を進めるに当たって、先行の重要な研究成果として必要な引用や言及をすることでリスペクトの証とする。またそのことによって広く知れ渡って、客観的なものにもなる。つまり自らの研究成果を発表するに当たって、当該課題に対する先行者の業績を踏まえることが前提になることは、今日、広く一般化している。そうして学術にたいする共通の財産としての敬意が払われることになる。このルールを守ることを集団—それは比較的少数の集団である研究会からそれらの集まった学会まで—が確認すると、全体としての前進も容易になる。その時の副産物として問題意識を共有することになるが、そこでは連想という同調・共鳴の考えが出てくる。それは独創ではないが、想像力を養うことになる。この想像力は独創性に結びつく多くの「見えない手」の一つでもある。そこからインスピレーションが湧くことも往々にして起こる。つまり創造と想像は連動していて、全体として一つのアイデアや理論を生み出す力となる。したがって独創を生み出す前提としての想像を養うこともまた大事になる。少年期にある種のあこがれを持って未来像を想像することは、たとえその時は空想であっても、そこには独創の芽がいくつも眠っていて、やがて成人後にそれが現実化することはしばしば起こりうる。それには鋭敏な感覚を日頃から研ぎ澄まし、新しい研究動向にも常に気を配る関心の高さ、好奇心が大事になる。ある日突然にインスピレーションがひらめいて、新しいアイデアが生まれたという逸

話をわれわれはいくつも聞かされてきた。

これら創造と想像という個人の脳内での刺激・考察システムの発揮の前提には、テーマを決め、問題意識を鮮明にし、対象に対する観察と考察を深めていくルーチン化した日常的な営みが生業としてある。そのために実験の繰り返えしによるデータ解析、文献による比較と参照、捕捉データの補充などを通じて、当該対象の定常性とその変化—場合によっては突然変異的な激変も含めて—を見極め、新奇なアイデアの湧出のための準備を常日頃から心がけていくことになる。それでも研究成果となるには、多くの時間を要するし、あるいは成果に結びつかないことが圧倒的ですからある。ただしそれを徒労と感ぜない粘り強さも必要となろう。一般に職人や芸者の世界では「運・鈍・根」と言う言葉がよく使われている。運は幸運に巡り会うこと、鈍は粘り強く勤めること、根は根気を失なわない意味であるという。これも一つの人生訓だが、研究においても根気強さと粘り強い追求が大事になる。ただし運は自分では開けないが、運が向いてきた時、その勝機を見逃さない機敏な対応が大事になる。それら全体を通じて先輩・同僚や恩師からの助言や暖かい励ましも大なる助力となる。そしてこれらを通じて共働（コラボレーション）による連帯意識とその気風の涵養が大切となる。それには参加者による忌憚なき批判と反批判というコミュニケーション・相互交流が大事になる。その際の心得は真理の前での誠実で私心なき承認という原則の遵守である。

なお独立の研究者として研究を進めるに当たっては、集団的な営為が欠かせないが、そこでは三つの自由—自説の自由、発表の自由、公表・出版の自由—が保障されねばならない。先人達は徒弟的・位階的・閉鎖的な研究環境の打破を目指して奮闘し、旧来の講座制の悪習を突破して「教室・研究室の民主化」に努め、さらには国際化を目指して海外留学や研究者の就労の新たな道を開拓した。その成果が戦後の日本における学術研究の飛躍的發展を導く大きな要因となり、ノーベル賞受賞者の輩出にも繋がった。その意義を忘れてはならないだろう。

三つ目には知を有効に活用するためには、実際に解答を求めている課題に適用していく着眼点を磨くことが大切になる。自然科学には疎いので、私が専門としている経済学に結びつけていうと、まず足下を改めて見つめ直し、実際の経済的・経営的社会活動に知を役立たせる方向に意識的に持って行く努力が望まれる。それには潜在的な需要を確かめ、まずは仕事を創り、そのための起業化ないしは組織化を進めるという手順を踏み、さらにそれに必要なファンドを大衆的に集めて資金獲得を図ることになる。そして実行の後には、冷静な評価が必要になる。その際に大事なのは、需要と供給の相互関連、つまりは「相互需要」という要素を重視する考えである。私の暮らしている京都でいえば、高齢者が多く、老朽化した家屋や空き屋も多い。このときこれらを更地にして売却を進めたり、高層マンションを作って移住者を招くという安易な「箱物行政」を改めて、この空き家や老朽家屋の再利用を考えるほうが多方面への好影響をもたらすことになる。老朽化した家屋の改修・改築によって地元業者の仕事を生み出し、そ

のための資材等の需要を高め、高齢者には快適な住環境を保障することになる。また空き屋の活用は手頃な住まいを探している働き盛りの家族に低額での住居提供を促す。相互需要に合った適切な賃貸料で提供できれば、家主の収入ともなる。その結果、県外からの移住者が増えれば、税収の増加も見込め、さらには追加需要も増加する。それらが行政の先導によって適切に運営され、かつ必要な助成策—たとえば医療、交通、教育、福祉など—も合わせて採用されれば、さらに円滑に行くことになろう。仕事を創ることから始め、地域の活性化と福祉向上につなげ、自治体行政と財政の健全化を生むことにもなる。加えてさらに住居の簡単な補修や修繕をしたい居住者に必要な技術指導をおこなう専門技能者—たとえば大工、瓦屋、壁職人、内装関係者などの建築関係者—を組織していけば、彼らに技術指導料が入るし、居住者のマイホーム維持機能も上がる。そのための効率的な連絡ネットワーク網をデジタル技術を活用して組織していくことに IT 技術者の先導的な役割が生まれる。このようにごく一部だけの利益ではなく、住民全体の便宜と利益と福祉の向上とそれに関連した地元業者の活用—つまりは「三方得」の世界の構築—にこそ自治体の再生の柱を立てるべきである。この計画に学術や科学も参与し、場合によっては先導役を果たせば、自らの足下を固め、かつ発展させる契機ともなり得る。

ここにあるのは、発想を変え、住民と地元業者の生活安定と向上のための施策の重要な一翼を担うという新たな基本視点の確立である。要求に基づく運動、住民の利益になるような工夫された課題への政策接近と行政の方向、オルタナティブ（別の道）の提示と遂行こそが活性化を生む。かくして連帯（solidarity）の輪が広がる。これは「絆（きずな）」ということでも表される新しい価値の追加であり、21 世紀の今日、極めて大事な基本フレーズになる。ユートピアは遠い将来の夢を描くよりも現実の中にあるものを一步一步着実に実現することに本筋がある。その確かな実感を共有することに 21 世紀のユートピア像の極めて大事なイメージ作りがある。だから再度言おう。共創—共働—共営—共栄の連鎖の確立こそが大事な標語となる。

## 終わりに

小論で筆者が基本的に述べてきたことを要約すれば、まず「知の時代」の到来は真理の相対性、専門的な深化、そして複合性と総合性を重視すべき段階をもたらした。その基底にあるのは、歴史的制約性を踏まえて、その限界を心得るべきだということと、にもかかわらず、それを超えた普遍性をもつ突出した成果が未来を照らす光明として生まれることにも期待したいということである。そこでは自然を一個の生態系（エコシステム）と考え、その総体としての相互関連をみていく複眼的な視点が大事になる。ここでは自然との調和に特別に重きを置いた。われわれは自然に学び、その声なき声にもっと耳を傾けるべきである。その意味では西遊記の主人公達が動物の化身であることの意味を改めて想起すべきであろう。またユートピアとディ

ストピアが表裏一体であるという意味合いは、理想がどんなに立派なものでも、適切な政策とその合理的で目的意識的な推進なくしてはいたずらに失敗を重ね、人々の大いなる失望を招くだけだということである。加えて物事には肯定と否定の両面があるが、その否定の中に新たなものを生む要素が潜んでいて、それを見つけ出し、十分に育てていくこともまた大事だという含意でもある。それには多くの失敗を重ねて、成功に至る道を切り開く努力を厭わないことである。加えて人々の叡智を結集して、たとえ遠回りとなっても説得と討論を通じる民主主義の発揚を最大限に発揮させることである。ここに政治的・学術的・社会的リーダー——人の賢者というよりも組織化された先覚的な「賢者集団」——の重要な役割がある。またその発揚には構成員による対等・平等な対話の積み重ねと合意形成への努力という、誠実で真摯な取り組みが何よりも大切だという教訓もでてくる。それは「全構成員の自治」と主体的努力こそが成功への近道だという考え方を表している。そして共創—共働—共営—共栄の連鎖のメカニズムを作り上げることである。そこにこそ 21 世紀のユートピアの基本線がある。

(2024 年 3 月 12 日脱稿)

## 注

- 1) 関下稔「『三国志』から現代中国と世界を推理する—易中天『三国志 素顔の英雄たち』を味わいながら—」『立命館国際研究』22 卷 3 号、March 2010、同「『水滸伝』の深層心理を探る—大衆操作の技法とイデオロギーについての一考察—」『立命館国際研究』24 卷 3 号、March 2012。
- 2) 諸星大二郎『西遊妖猿伝』第 1 部大唐編および第 2 部河西回路編、合わせて 16 卷、1998 年、潮出版社。なおそれに続いて西域編が目下執筆中である。
- 3) 中嶋敦『わが西遊記』、『中島敦全集 2』所収、ちくま文庫、1993 年。
- 4) 筆者は中国の歴史に関して興味を持っているが、中国史を専門に研究しているわけではない門外漢である。素人としての接し方であるが、泰斗としての宮崎市定氏の著書を昔から愛読してきた。とりわけ隋の煬帝と唐の太宗に対する世評とは異なる評価には思わず唖った。その上で、川勝義雄『魏晉南北朝』講談社学術文庫、2003 年には瞠目させられた。そして最近相次いで出版された合田大輔『南北朝時代—五胡十六国から隋の統一まで』中公新書、2021 年、森部豊『唐—東ユーラシアの大帝国』中公新書、2023 年、平田陽一郎『隋—「流星王朝」の光芒』中公新書、2023 年、岡本隆司『物語江南の歴史』中公新書、2023 年などを興味に委せて読み漁っている。
- 5) たとえば岡田英弘『世界史の誕生—モンゴルの発展と伝統』ちくま文庫、1999 年、杉山正明『遊牧民からみた世界史』日本経済新聞社、増補版、2011 年、楊海英『逆転の大中国史』、文春文庫、2019 年など。現世人類（ホモサピエンス）がたどったアフリカから出てヨーロッパを経てアジアへの東方の旅を逆転させる、匈奴に始まる遊牧民の一部のアジアから西方への大移動はフン族のローマ侵攻に波及し、やがてローマ帝国の衰亡を経てビザンチン帝国の興亡、さらにはモンゴル世界帝国の成立までも視野に収めるまことに雄大なストーリーであり、かつまたヒストリーでもある。西洋と東洋の隔絶ではなく、遊牧民を媒介にした人々の交流と繋がりが活写されていて、爽快である。
- 6) この 13 本を実際のロシア革命を領導したレーニンの珠玉の名著作と絶賛しているのは、スラヴォイ・ジジェク『迫り来る革命』長塚豊訳、岩波書店、2005 年。

『西遊記』から考えるユートピアとディストピア（関下）

- 7) V.I. レーニン『唯物論と経験批判論』、『レーニン全集』第14巻、マルクス・レーニン主義研究所訳、大月書店、1956年。
- 8) F. エンゲルス『反デューリング論』、『マルクス・エンゲルス全集』第20巻、大内兵衛、細川嘉六監訳、大月書店、1968年。
- 9) V.I. レーニン『唯物論と経験批判論』第2章第5節、前掲。
- 10) 近代の図書館像を切り開いたのは「大英博物館」だが、そこでは収書を進めるために、著作者からの無料の献本を求め、それに対して全国統一的な登録をおこなって類書や海賊版の横行を食い止め、かつ閲覧を通じる広範な利用を促した。そして著作権の確立と普及に寄与した。その経緯については、藤野幸雄『大英博物館』岩波新書、1975年がある。ここで取り上げた「ニューヨーク公共図書館」に関しては、菅野明子『未来をつくる図書館—ニューヨークからの報告』、岩波新書、2003年が、その内容を詳しく紹介している。また筆者（私）がワシントンDC在住中に連日のように通ったアメリカ議会図書館に関しては藤野幸雄『アメリカ議会図書館—世界最大の情報センター』がその内容を紹介している。筆者はアメリカ在住中にレジデントである立場を活用して議会の公聴会と kongressライブラリー（議会図書館）、並びにその周辺に点在する政府関係機関の図書室や資料室を巡るのが日課になっていて、そのため、毎朝『ウォールストリートジャーナル』や『ワシントンポスト』で議会公聴会の予定を探り、郊外から地下鉄でワシントン詣でをしていた。すごく充実した一年余だったことを思い出す。
- 11) アルビン・トフラー『パワーシフト』上・下、徳山二郎訳、中公文庫、1993年。

（関下 稔，立命館大学名誉教授）

## Utopia and Dystopia in the Contemporary Information Technology Age

*SAIYUKI, Magic Monkey: A Journey to the West* is the most popular classic of Chinese literature. It is an amazing story of adventures when traveling to India with the Buddhist priest Tripitaka (Sanzohoshi) in search of sacred scriptures. It is also a dreaming story of Utopia.

Karl Marx and Friedrich Engels proposed their own scientific socialism in response to the utopian socialists represented by Charles Fourier, Henri de Saint-Simon and Robert Owen. Marx and Engels established their own theory based on materialism and dialectic, especially historical materialism and the logic of dialectic. They comprehensively analyzed the capitalist economy and asserted the limits of capitalism, advocating the advent of an age of socialism after capitalism in which people could enjoy a kind of utopian paradise in the future. This concept came into existence in the age of industrialization in the nineteenth century, building on the historical materialistic view of civilization.

However, it is somewhat different from the contemporary information technology age. Human intellectual ability promotes information technology and grows intangible assets. But at the same time it produces widening of the income gap among people. Many people have forms of mental disease in our time. We must think about utopia and dystopia from both sides, both materialism and mind.

(SEKISHITA, Minoru, Professor Emeritus, Ritsumeikan University)